

## 命「生」と「死」

青森県青森市立東中学校

三年 根井晴加

『敬仁会病院にいます。』

部活を終え、いつも通り家に帰ってきた私は玄関のホワイボードに書かれたメッセージを見つけた。この時はまだ何が起ったのか知る由もなかった。

「ただいま」と居間のドアを開けて言うと、そこには妹だけがいた。父も母もいない。静かな空間。何か嫌な予感を感じた私は、妹に「お母さんは？」と聞くと、思ってもみなかった言葉が返ってきた。「おばあちゃん死んだって。」いきなりのに頭が追いつかなかった。理解することができなかった。何も考えることができなかった。だから私は妹に「嘘つけ、冗談でしょ。」と言い、返事を聞く前に自分の部屋に閉じこもった。嘘だ、嘘に決まっていると思っただけで、私の涙は止まらなかった。

しばらくすると、父と母が帰ってくる音がした。しかし、私はしばらく部屋から出ることができなかった。怖かったのだ。

意を決して居間に行くと、父と母が祖母の部屋の家具をすべて運び出していた。まさか、本当に……。私は恐る恐る祖母の部屋に入った。そこには嘘であってほしい光景があった。ぴくりとも動かず、顔に白い布をかぶせられた祖母がいたのだ。昨日の夜、

いつも通り一緒にご飯を食べ、スイカを食べていたはずなのに。なんで……。

この時、私は初めて死を身近に感じた。人はいつ死ぬか分からない。昨日まで普通に会話していた人が突然いなくなるかもしれない。死は誰にも予想できないのだ。「生」と「死」は紙一重なのかもしれない。

祖母はよく戦争の話をしてくれた。戦争中はいつも死と隣り合わせだったらしい。自分の近くに爆弾が落ち、命からがら逃げたという話も聞いた。辛くても祖母は生きることを諦めなかった。生きたくても生きられない人がいる。だから自ら「死」を選ぶことは、そういう人達に失礼なことなのだと改めて考えさせられた。

しかし、私は一度、本気で「死にたい」と思ったことがあった。小学生の頃、私はいじめを受けていた。はじめは我慢していた。しかし、我慢が限界までいったとき、死にたいと本気で思った。ここにいっても楽しいことなんてない、なんで生きているのだろうと。「死」への恐怖心が消えてしまったのだ。そんなとき、手を差し伸べてくれたのは先輩だった。その先輩がいなければ、私は一つしかない命を粗末にするところだった。

祖母の死やいじめを経験したことは、私にとつて「命」のことを真面目に考えるきっかけとなった。死はいつおとずれるか分からない。死を予想することはできない。だからこそ、生きている今を大切にしなければならぬ。死を自ら決めることは、この先待っている楽しい時間を過ごすことができず、とてももったいないことだ。さらには、生きたくても生きられなかった人に対してとても失礼なことだと私は思う。この世に生まれてきたからには、生きる意味がある。しかし、生の後には必ず死がある。た

ただ死を待ちながら生活するのではなく、生きているこの時間をどうやって楽しんで過ごすかを考えることが生きる意味を見つけた。一つの手立てではないかと私は思った。生きていることが辛くなった時、まわりを見れば必ず自分の味方がいる。この人達に迷惑をかけてはいけなと思うと、自然と生きる意味が見つかる。これが私が「死」について真面目に考えた結果だ。

ならば、「生」とはどういうことだろう。生（生きる）とは、目標を持ち、その目標に向かって一歩ずつ歩んでいくことだ。しかし、この一歩はそう簡単には出せない。一歩一歩、歩むために努力を積み重ねなければいけないのだ。努力をして、少しずつ目標に近づいていくと、そこには成長した自分が見える。さらに、目標を達成することで、生きる楽しさが見つかるのではないだろうか。

祖母からはたくさんのお話を学んだ。祖母は生前、「あとは死ぬだけだから」とよく言っていた。これは、生きることを諦めたのではなく、目標を達成することができ、生きる楽しさを十分に味わったこととで出た言葉なのだと私は思う。

祖母の死、いじめを経験して、私は生きる意味を知った。目標を持つことの大切さを知った今、私は志望校合格という目標に一歩一歩努力をしている。

たった一つの命。死を待つのではなく、生きている時間を大切に、目標に向かって私は歩く。

## 作文を書くに当たって

私が書いた作文が、改めて「命」のことを考えるきっかけになってほしいと思って書きました。書いていくうちに、自分も「命」について深く考えることができました。2つの辛いことを乗り越えた今、私はとても楽しい中学校生活を送ることができています。この作文がだれかの力になれば嬉しいです。